

# 小さなせせらぎの思い出

代表理事 宮村 忠

横浜市の「母なる川」を想い描けば、二人の「母」、大岡川と帷子川となりそうです。

こんな変な選び方になってしまうのは、横浜の特別な成立経緯に由来しています。

横浜は新しいまちと言われます。黒船が来航してから、わずか100戸ほどの寒村にすぎなかった横浜村が、突然歴史の表舞台に登場することになりました。160年ほど前、ペリー提督がやってきました。山手の丘から「横」に細長く突き出た「浜」の中央部あたりに上陸し、急遽築いた応接所において、幕府と日米和親条約を締結しました。鎖国政策を止めさせ、開国へと大転回させました。寒村横浜村は開港場となり、ペリーの上陸したところには波止場が築かれました。山手の丘から東側に外国人居留地が設けられ、関所の内側ということから、「関内」となりました。その西側の関外には日本人商人達が移住してきました。そこでは、都市形成の歴史で定形となっている「自然条件」→「人文条件」→それらを進化発展させる「社会・経済条件」の流れとは別に、まったく新しい過程で港都の建設がはじまりました。その場所が、大岡川と帷子川の下流でした。伝統的な土木技術や風習のしがらみから解放された新しい手法で、下水道・上水道・鉄道などの西欧技術がまっ先に導入され、「港都」にふさわしい近代的なまちづくりが展開されました。この舞台となった大岡川と帷子川は、「母なる川」といえるでしょう。

大岡川は、円海山（三浦半島の最高峰、53m）から流れだし、港南区・南区・西区へ南下し大棧橋と赤レンガ倉庫の間で横浜港へ入ります。途中で、運河・河岸のために造った堀割川を分流し、さらに江戸時代末期に吉田新田造成のために造られた堀川が分流しています。

一方、帷子川は、旭区の若葉台大規模団地付近から流れ出て、保土ヶ谷区・西区を東流し、石崎川・新田間川を分流して「みなとみらい21」で横浜港に流れ出します。

大岡川も帷子川も、人口密集地ですし、下流には関内・桜木町・横浜の駅前繁華街があるので、洪水氾濫に悩まされてきました。そこで昭和33年の狩野川台風に伴う洪水を機に、両川とも大規模な分水路トンネルが開削されました。それでも、浸水の悩みからは解放されておらず、昨年の豪雨でも、「豪雨があと10分続けば」という「危機一髪」の状態でした。

ところが、横浜には、致命的な弱点がありました。発展する「港都」の生活や生産を賄う「水」が無いのです。大岡川、帷子川では不可能です。そこで、おもいきって、西北に50kmほど離れた相模川に水源を求め、隧道を多用して延々と水路を造り、浄水場を構築しました。日本最初の近代水道の登場です。

ですから、横浜には、もう一人の「母」が遠くにいたこととなります。

ところで、横浜には、もう1つの顔があります。ほとんどの土地が台地で形成され、埋め立て地を除けば、平場はほんのわずかです。その平場の大部分は、台地を切りこんだ「谷地」と呼ばれるところで、細長い谷地田（谷津田）が分布しています。これらの谷地には、湧水が随所にあります。そこでは、ホタルが飛び交います。大都市横浜は、また、ホタルの名所でもあります。私にとって忘れられないホタルの体験がありました。

30年前の5月初旬、横浜在の友人達が私の職場であった関東学院大学にやってきました。「ホタルを見に行きましょう」とのお誘いでした。「今年の夏に」ということかと思いきや、5月の連休明けに行くというのです。ホタルといえば、夏、と思いこんでいたので、少々戸惑いました。

夏に飛び交うホタルは、その前に、成虫になるため、土の中にもぐって「時」を待ちます。横浜では5月初旬～中旬に幼虫が穴を求めて水中からはい出し、成虫までを過ごす穴を求めて岸辺をよじのぼってきます。ホタルは、生涯発光するという事です。幼虫が岸辺をよじのぼるときも光が見えるということで、5月のホタル見学になりました。3日間探し求めました。帷子川中流の谷地で初めて見ました。次の日、大岡川の上流谷地でも見つけることができました。3日目は、柏尾川支川の谷地で、ホタルの幼虫行列を見て驚きました。それから夏休みに入る前、梅雨の時期、つかの間の雨上がりに、学生と連れだって、幼虫の行列現場へでかけてみました。幼虫とは違って夜空に、木陰に、明るい光が飛び交うさまを見て、学生たちは大喜びでした。私は得意然で、帰りのビールもおいしかったのですが、同行してくれた横浜市役所の友人から、注意を受けました。谷地の入口近くに、民家があり、静かな佇まいを大切にしている。騒がしいのは大変迷惑で、気をつけて欲しいということでした。谷地のせせらぎも、多数の人達がやってくると、どうしても水辺が荒らされてしまうということで、保全するのに大変気を遣っているという話でした。この翌年から四半世紀にわたって、私の河川工学の講義は、夜間の見学を加えました。好評でした。もちろん、留意事項を厳しく伝えました。騒がない、ライトは足元を照らすだけ、水辺に入らない、ネットで場所を知らせない、等々。ホタルの情報を広く伝えたいと思う反面、多くの人が集まっても苦る。小さな谷地のホタル保全は、そんな悩みをかかえた人たちによって、継承しているのでしょうか。幻想的な光を眺める、風情ある夏の夜の思い出です。